

# 最新事情

高校生である今から  
地域で活躍できる、社会人になる

## 広島県立総合技術高等学校

(広島県三原市)

広島県立総合技術高等学校は、工業科、商業科、家庭科と、専門学科のみの新しい高校として、平成17年に創立された。以来、地域活動を通して、技術とマインドを備えたスペシャリストの育成を目指している。

中でも、家庭科では全員がサービス接遇検定に取り組み、ヒューマンサービスの基礎を学んでいる。家庭科人間福祉科の取り組みを中心に、教育とその目標について伺った。

### 社会人としての在り方を 本物から学び取る

就任3年目になる飯田恵美子校長は、同校の生徒に求めるものを「社会人として通用すること」と言う。ただし、それは卒業後ではなく、今すぐの話なのだ。

入学直後から繰り返し伝えているのは、「高校生ではなく、社会人であれ」ということ。60を超える中学から集まった生徒たちに、気持ちをリセットしてもらおう意味合いもあるようだ。

「例えば、今日にでも面接に行くことができるくらい、身だしなみやあいさつ、振る舞いまで、自覚を持って整えなさいと生徒には話しています。意識の切り替えが必要

実習の授業などの前には全員であいさつの発声練習。家庭科人間福祉科では「よろしくお願ひします」「失礼いたします」「申し訳ございません」「お疲れさまでした」「ありがとうございました」の頭文字をとって「よしMOA」あいさつ。学科ごとに少しずつ練習する言葉が異なる



なのです。厳しいと思われるかもしれませんが、できないとしたらそれは甘えがあるからです。社会とは思っている以上に厳しいもの。それをよく理解して、どのように振る舞っていくか考えてもらいたいですね(飯田校長)。

同校の教育の特徴は、実習やインターンシップ、学内でのイベントを通じ実践的に学ぶ機会を多く取り入れていること、そして、徹底して本物のプロから学ぶことである。社会人であれ、という願いはこのような学び方の中にもはっきりと現れている。

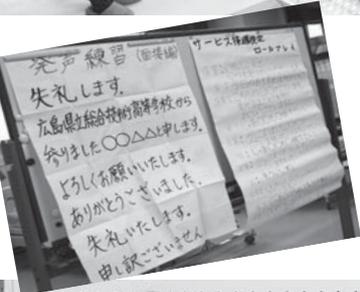
「職業人として一人前になるためには、とにかく本物を見て学ぶことが一番です。本校では、現場で働いている方々に指導を仰いでいます。例えば家庭科の食デザイン科ではホテル・料亭の現場のプロから毎週手ほどきをしていただきますが、これは老舗の厨房に弟子入りしたようなもの。生徒と教員とはまた違った関係です。同じく家庭科の人間福祉科では、施設で働くプロの介護士が技術の指導をします。学科ごとにその道のプロを招いて、技術習得や資格取得のための指導をしていただきますが、生徒たちは食い入るように見て学んでいます。技術だけでなくプロの集中力、意欲もそのままモデルになります(飯田校長)。

### サービス接遇検定で マナーやマインドを理解する

家庭科の人間福祉科と食デザイン科にはそれ



サービス接遇検定準1級面接の指導は、既に合格した生徒が、次に受験する生徒を教える。試行錯誤しながら教えることで、復習にもなっている



飯田恵美子校長

それ1学年40名の生徒が所属している。人間福祉科の長谷川真由美先生は開校2年目から在籍し、生徒を指導してきた。同科では、保育や介護、調理、被服といった多様な実習科目と、地域の乳幼児や子ども、高齢者との交流から実践力を養い、保育職・介護職・看護職などで働く「職業人」として必要なコミュニケーション能力とサービスマインドについて学ぶのが目標である。



家庭科人間福祉科の長谷川真由美先生



3年生の寺谷美穂さん(左)と伊藤瑞希さん。寺谷さんは「大学受験でも面接があり、緊張しましたがサービス接遇検定で学んだことを自然に実践できました」と話す。卒業後は保育と福祉を学ぶため進学予定。伊藤さんは1級にも挑戦したが、筆記試験の壁が厚く不合格。接遇の仕事に興味が出てきたと言い、「1級にも絶対にまた挑戦します!」と意欲的だ

「生活産業基礎」は、社会の変化に対応していく人々の生活と、衣食住や保育・介護などの関わりを職業という側面から学ぶ家庭科の専門科目である。人間福祉科、食デザイン科で内容は少しずつ異なるものの、単に物を提供するだけではない、ヒューマンサービスとして職業を理解し、将来につなげる内容だ。

この科目内では、両学科の生徒全員がサービスマインディングに取り組んでいる。

「サービスマインディングには、医療やフードサービスの場面もあり、生徒が職業に対する意識を形成するのに役立っています。実際にどのようなやりとりがあるのか、そのときのマナーはどうかといったことも問題から読み取ることができます」(長谷川先生)。

夏休みには『実問題集』(3級、2級)を一同おり解くことを宿題にしている。生徒は各自、ノートに解答とその選択肢を選んだ理由を書き、その後解答を見て添削する。間違った場合

は正しい答えと、なぜそれが正しいのかも赤ペンで書き込む。これを最低でも3回は繰り返すそう。どうしてそう考えたのか、どうしてその答えになるのかを記録して、しっかり理解できるようにするためです。やはり生徒は、接遇や一般常識の問題が苦手。それも、理由からきちんと理解することで克服できると考えています」(長谷川先生)。

「生活産業基礎」の中では、外部講師を招いてあいさつやお辞儀、立ち居振る舞いの実技指導も受けている。ピリッとした空気の中で緊張しながら学ぶことで、生徒の意識は大きく変わる。生徒のやる気は非常に高い。準1級を目標に据える生徒も多く、毎年10数名が挑戦し、合格しているという。

人間福祉科3年生の寺谷美穂さん、伊藤瑞希さんは1年生でサービスマインディング検定3級、2年生で2級、準1級に合格した。同校では、既に準1級に合格した生徒が、新たに受験する後輩に面接のための実技指導を行っており、今年も二人も先生役を務めている。

「準1級面接試験を実際に体験した生徒が、こうだった、ああだったと具体的なアドバイスをするので、



「生活産業基礎」外部講師を招いた実技指導。生徒の顔が引き締まる



全校を挙げて積極的に取り組む地域活動が幾つもある。  
文化祭である「総高祭」(左上)、高齢者や子どもを招いて行う「総高わくわくサロン」(左下)、月1回開催の「華金ショップ」(右上)など。家庭科では、販売やサービス、レクリエーションを行い、おもてなしの心を学んでいる



雰囲気を理解しやすいようです。教える生徒にとっては、学び直しと立ち居振る舞いの定着になりますし、教わる側は時間を取って教えてもらっているという感謝の意識が生まれるためやる気につながっています」と長谷川先生。練習はいつも放課後。教える生徒、受験する生徒が数名ずつ集まって、11月始めごろから数回行う。先生の言葉どおり、「面接の指導は、自分たちも先輩から教えてもらったので、今度は自分の番。受験したのは1年前なので忘れていないこともあり、教えながら自分でもできていないところ

ろを反省し、復習もできています」と寺谷さん。伊藤さんは「言葉で説明するだけでは駄目なので、そこが難しいです。そのとき形だけつくっても、意識ができていないと次に同じようになりません。例えば、手を前で重ね、背筋も指先も伸ばしてお辞儀をする、そのとき『形を意識して』と言っても、なかなか伝わりません。この意識のことは教えるのが難しいです」と、教えることの難しさを感じているようだ。合格者は他の授業でもあいさつなどのお手本として活躍しており、準1級合格は生徒にとって身近な目標になっている。

## 学校はミニ産業社会 一足先に社会人の意識を

飯田校長は就任後、「心を鍛える技を磨く地域社会に貢献する」のスローガンを掲げた。専門的職業人、将来のスペシャリストを育てる同校の教育目標をよく表した言葉だ。

「普通科の生徒も職業について学びますが、本校では、高校3年間で職業意識と技術とを身に付けることができます。普通科の生徒より、一歩も二歩も先を行っているのです。工業科、商業科、家庭科で構成された本校では、ものづくりにから販売まで、幅広い分野で学びます。さながら「ミニ産業社会」です。だからこそ、人との接し方や守るべきルールも今から実践してほしい。しかるべきときにしっかり声が出るよう、大きな声であいさつする。宿題の提出日・当た

り前のことです。提出時間が決まっているなら、約束の時間を守る。できなければ社会で通用しないということが分れば、やらされているとは思わないでしょう」(飯田校長)。

今学んでいるのは真の「社会人」になるためであり、合格・採用がゴールではない。生徒にはその先を考えて、夢、目標を立ててほしいと話す。「君たちは社会に出るのでしょー」と折に触れ問い直しているという。

同校には、複数の専門学科を擁するという特性を生かした活動もある。例えば、工業科で開発した、踏むだけで簡単に消毒液を噴霧させる商品「消毒洗隊フムンジャー」(現在、商標登録願中)。現代ビジネス科で宣伝し、人間福祉科では販売促進のために歌を作ったりと、学科を超えた融合も試みている。他学科の生徒と、お互いにすごいなと感心したり、負けないぞとライバル心を燃やすだけでなく、それぞれの専門分野を生かして協働することで、産業社会を模擬体験する。複数の専門学科の特徴を強みにして、まだまだ新しい取り組みが生まれそうだ。

その感触どおり、「新しいことをするのが面白い」と話す飯田校長。「どんどんチャレンジしていきたいと思っっています。発掘しきれない宝がもつとあるはず。先行事例がないのは苦しく、試行錯誤は続いています。大事なのは苦化と継続です。県内のオンリーワンの高校として、長く、地域に定着することを目指しています」。